

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」

第四部「賀茂大社と籠神社・眞名井神社の神」 講座計画表

第 1回(XX/XX/' XX) 賀茂大社の創建由緒

第 2回(XX/XX/' XX) 賀茂祭(葵祭)と賀茂社の社殿

第 3回(XX/XX/' XX) 篠神社・眞名井神社の由緒

第 4回(XX/XX/' XX) 篠神社の祭神と徐福伝説

第 5回(XX/XX/' XX) 篠神社・眞名井神社の社殿と伝承

第1回 賀茂大社の創建由緒

- ・賀茂氏の由来
- ・上社・下社の祭神の御生(みあれ)
- ・賀茂氏と秦氏の繋がり

出典:「日本の古社 賀茂社上賀茂神社史の賀茂神社」

岡野弘彦・櫻井敏雄・三好和義著(淡交社)、

「賀茂御祖神社」賀茂御祖神社編(淡交社)、

「上賀茂神社へのいざない」賀茂別雷神社(賀茂別雷神社)、

「葵祭の始原の祭り 御生神事 御蔭祭りを探る」

下鴨神社宮司 新木直人著(ナカニシヤ出版)、

「失われた徐福のユダヤ人「物部氏」の謎」飛鳥昭雄・三神たける著(学研)

「古事記」(竹田恒泰著、学研)、「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)他

1. 賀茂大社創建由緒

参考資料1-1

(1) 賀茂大社の構成

- * 賀茂大社は、賀茂別雷神社(かもわけいかづちじんじゃ)と賀茂御祖神社(かもみおやじんじゃ)の併称である。
 - ・両社は、一般に賀茂別雷神社を上賀茂神社(かみかもじんじゃ:上社)といい、
 - ・賀茂御祖神社は下鴨神社(しもがもじんじゃ:下社)という。
- * 両社は一体視され、伊勢神宮につぐ大社、官幣大社の筆頭として朝野の崇敬を得て来た。

(2) 祭神の由来

① 賀茂大社祭神の関係

* 賀茂大社の祭神

- ・上社: 賀茂別雷神(カモワケイカヅチノカミ)
- ・下社: 賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)、玉依姫命(タマヨリヒメノミコト)

* 祭神の由来: 風土記の逸文「可茂社条」(「釈日本紀(しゃくにほんぎ)」所引)

- ・賀茂建角身命は、かつて「大和の葛木山の峰」にいたが、「山代の岡田の賀茂(御蔭山のこと)」を経て降臨され、「久我(こが)の国の北山の基(久我神社の処)」に居を定めた。
 - ・その命が、「丹波の国の伊可古夜日女(イガコヤヒメ)を娶(みあ)って「玉依日子(タマヨリコ)」と「玉依日女(タマヨリヒメ)」を生む。
 - ・玉依日女が石川の瀬見の小川(鴨川のこと)で得た「丹塗矢(にのぬりや)」との間に生まれた子が「可茂別雷命(カモワケイカヅチノミコト)」。
 - ・丹塗矢は乙訓(おとくに)の社に坐(いま)せる火雷神(ホノイカヅチノカミ)であった。
 - ・この御子神が「可茂(かも)の社」(上賀茂神社)に祀られる。
 - ・下鴨神社を、風土記は母神、祖父母神を「三井(みい)の社」に祀ったと記述する。
- ⇒この御子神から見れば、母神の玉依姫命と祖父母神の賀茂建角身命と伊可古夜日女は「御祖神(みおやがみ)」になるため、下社は「賀茂御祖神社」という。

地図サイト有

②賀茂社祭神の古伝承の解釈

参照資料1-2

秦氏系

- ・賀茂建角身命は、かつて大和にいたが、山城の北の久我(くが)国~~の北山(久我神社)~~に移って来た。
 - ・そして、丹波に勢力を持つ豪族と手を結び、その娘伊可古夜日女との間に玉依日女を生んだ。
 - ・玉依日女が乙訓(おつくに)社(現:長岡京市の処)で火雷神を祀る豪族と結び合わされて別雷神を奉ずる強い後継者に恵まれた。
- ⇒賀茂氏は賀茂の地域で一大勢力を築いていくことになった。

③「山城国風土記」逸文の賀茂建角身命の追加記述

- ・もともと「日向の曾の峰に天下り、南九州の高千穂にいた。」
- ・やがて、神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイワレビコ)の東征にあたり、「御前(みさき)に立ち」(先導役を務め)
- ・いったん、「大倭(やまと)の葛木山の峰に宿る」(大和の西方にいた)
- ・けれども、そこから改めて「山城の岡田の賀茂」へ遷り、
- ・ついで「葛野河(桂川)と賀茂川(鴨川)との会う所に定(しづ)まり」(両川の合流点あたりにいた)
- ・さらに鴨川を遡のぼって「久我の国の北山の基(久我神社辺り)に定まります」

④日本書紀(720年)や新撰姓氏録(810年)から

- ・神武天皇が「中州(なかづくに:畿内)へ東征の途次、「山中」で迷った際、賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)が「大鳥」=「頭八咫鳥^注(ヤタガラス)」となって先導したこと、その功を賞されて「葛野県」を賜り、その子孫が第13代成務天皇の御代(四世紀中)に「鴨県主」を定め賜った。
(注)頭の大きさが八咫ある鳥(1咫=16cm)
- ・賀茂建角身命は神武東征後に下社の場所に定住したことになる。

(3)「天神(あまつかみ)」系と「地祇(くにつかみ)」系のカモ氏

*「大宝令」注釈書^注の「古記(こき)」(「令集解(りょうのしゅうげ)」所引)によれば、

(注)奈良前期の天平十年(738年)ころに作られた。

「山城(代)の鴨」は「天神」系だが、「葛木の鴨」は「地祇」系と区別している。

⇒「葛木の鴨」が山城に移ってきたのではない。

*「地祇」系のカモ氏

- ・鴨君・賀茂朝臣は、元来三輪氏(神(みわ)君・大神(おおみわ)朝臣)と同じく大物主神(大国主命)の後裔である。
- ・この一族が早く原拠の三輪から葛木に移り住んでいた。

*「天神」系のカモ氏

- ・鴨県主、賀茂県主は、神魂神^注(カンダマノミコト)の後裔である。

(注)邇芸速日命(ニギハヤヒノミコト)の随伴神

- ・神武東征時は熊野辺りにいて、葛木に移ったが定着せずに山城の岡田から久我の北山(現在の久我社あたり)へ移り住んだ。⇒下社のカモ氏

- ・東征の先導(ヤタガラス)の功で、「玉依彦命」から十一世孫の「大屋奈世(おおやなせ)」が第13代成務天皇(四世紀ごろ)より「葛野県」を賜っている。(新撰姓氏録)

⇒このころ山城に移った(降臨)と想定できる。

2. 上社・下社の祭神の御生(みあれ)

祭神の御生れ祭が、葵祭(5月15日)の前儀として5月12日に行われる。御生れ祭を下社は御蔭祭(みかげまつり)、上社は御阿礼神事(みあれしんじ)という。

参照資料1-3

(1) 御蔭祭の起源: 現在の上社の西約一キロに鎮座する「久我神社(くがじんじゃ)」

- ・「日本三代実録」^注の貞觀元年(859年)正月条に「久我神(賀茂建角身命)」への加階(従五位下)をし、「延喜式」神名帳に式内社として登録される。

(注)平安時代に編纂された歴史書。六国史(りくこくし:日本書紀、続日本記、日本後記、続日本後記、日本文德天皇実録、日本三代実録)の第六にあたり、清和天皇、陽成天皇、光孝天皇の3代である天安2年8月から仁和3年8月までの30年間を扱う。

- ・古来「氏神(うじがみ)社」とされ、上社の摂社に位置付け、毎年11月3日に神幸祭(神輿渡御)がある。

(2) 下社の御蔭祭

参照資料1-3

① 御生れ祭の始まり

* 力氏神祭(うじがみさい)の最初は久我神社辺りで始まり、後に蓼倉里(たでくらごう:現在の下社境内内)の三井社^注で営まれるようになり、奈良時代ごろに下社=賀茂御祖神社(かもみおやじんじゃ)へ発展したと考えられる。

(注)祭神は、賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)、後の伊可古夜日女(イガコヤヒメ)と御子の玉依姫命(タマヨリヒメノミコト)の三柱を祀る「三身社」=「三井社」

* 社伝では、下社の造営は、第10代崇神天皇の七年(BC90)に神社の瑞垣(みずがき)の築造がおこなわれたという記録があり、それ以前の古い時代から祀られていた。(続日本紀)

・糺の森(ただすのもり)周辺の発掘調査で縄文時代の土器や弥生時代の住居跡がたくさん発掘され、それを裏付けています。

② 御蔭祭

* 目的: 5月12日に力氏の本義ともいえる御蔭祭りが行われる。御蔭神社の神殿で御生れされた賀茂建角身命と玉依姫命の荒魂の御神靈を本宮へ御神馬で奉還し、還立(かえりだち:帰途)する。そして、本社の和魂と一つになられ御神威を回復される祭りであり、現在は葵祭の前儀として行われる。

②御蔭祭(つづき)

* 御蔭山の儀: 本宮からの宮司・神官により、「御蔭山の儀」と「御生神事」が祝詞などによって行われ、「御生木(みあれぎ)」に依りついた賀茂建角身命の荒魂と玉依姫命の御神靈を櫃に込める。

* 路地祭(ろじまつり)と還立(かえりだち)の儀

- ・路地祭: 御蔭山の儀によって神靈を移した「神靈櫃(しんれいひつ)」を奉じて山を下り、行列は賀茂波爾(かもはに)神社での路地祭を経て、
- ・還立の儀: 神靈櫃を御錦蓋(ごきんがい)で覆い神馬に載せて、下社へ戻る。

<参照>賀茂波爾神社は、

一もともとは「赤の宮」と言われ、祭神は「波爾安日子神(ハニヤスヒコノカミ)」「波爾安日女神(ハニヤスヒメノカミ)」、神徳は大地の守護神である。「波爾」は土師器(はじき)土を意味する。

一鶴県主本系の系統で賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)を祖とする西泥部氏(にしつちべし)が社職とする土師器(はじき)の製作を世襲していることから波爾の神を祀った。

(注)神饌を日常奉る土器の製作に従事する氏族

一路地祭では、祝詞、還城楽(げんじょうらく)を奏す。

参考資料 1-3、サイト有

(注)雅楽の唐樂の曲名の一つで、蛇を好んで食べる胡国の人々が蛇を見つけて喜んだ様を舞にしたものとも伝える。

* 紂(ただす)の森において、東游(あずまあそび)と呼ばれる舞楽が奉納される「切芝神事」の後、御生木(みあれぎ)を神馬から本殿に移して、夕刻に終る。

<参照>「切芝神事」

- ・御祭神賀茂建角身命は、東の倭國から船に乗り西方に向いて御出でになったと、氏人(うじびと)たちの伝える古事によって御祭神の来歴を奏することが神事であった。
- ・切芝神事では、「東游」が奏される。「游」とは神と人が交流することを伝えている。

<参照>「東游」

参考資料1-3、動画サイト有

・東游は東国地方の風俗舞であり、一説には第27代安閑天皇(6世紀)の頃、駿河国の宇戸浜(うどはま)に天人が降りて歌い舞つた姿をなぞらえ国人道守が作ったと言われている。

〈参照〉「東游」(つづき)

- ・第59代宇多天皇の寛平元年11月賀茂の臨時祭の時に始めて用いられてから神事舞として諸社の祭典に奏られるようになった。
- ・曲は一歌、二歌、駿河歌、求子(もとめご)歌、大比礼(おおひれ)歌からなる一大歌舞組曲で、京都の葵祭で奏されるのが有名である。舞人六又は四人、拍子歌方数人、和琴(わごん)、篠篥(ひちりき)、高麗笛(こまぶえ)の編成で、舞は駿河舞と求子舞の2つで、動きの少ない上品な舞と云える。

(3) 上社の御阿礼神事

① 御生れ処

サイト地図あり

- ・北約2キロにある「神山(こうやま)」とその南麓の上社に近い「丸山(まるやま)」の南野辺りと言われる。
- ・神山の山頂に露出する大きな岩石はカモのカミ(雷神)の「磐座」とされ、「垂迹石(すいじやくいわ)」と言われてきた。

② 御阿礼神事

参照資料1-4-①

- ・葵祭の前儀として、神山との間にある丸山の一角にある御生野(みあれの)に祭場を作り、5月12日の夜に秘儀として御阿礼神事が行われる。
- ・御阿礼神事は全神職と矢刀禰注(やとね)5人が参列し、深夜に神座(かみくら)で御生(みあれ)された神靈の新たな命を暗闇で迎える。(注)神を遷靈する祭官
- ・神靈を真榾(まさかき)に移し、奉持して本殿前の棚尾社注に二本、参道脇の遙拝所(権殿を指す)に三本樹(た)て、宮司が本殿で祝詞する。
参照資料1-4-②
- ・内陣の御帳台には「勧請(かんじょう)の古麻(こぬさ)」(阿礼棒:あればう)と「御三器(ごさんき)」(鏡、小枕、角)を立てかける。
- ・神靈を勧請の古麻と「御三器」に取りつかせ、若々しく神威が蘇った神靈を迎える。

③ 遥拝殿

- ・上社の社伝は中央より右に本殿、左に権殿注(ごんでん)があり、中央(透廊:すいろう)からは丸山を通して神山の磐座を遙拝する形式になっている。神山の遙拝所でもあります。
(注)遷宮ための予備殿、神山の遙拝所にもなります。
- ・社史では、第40代天武天皇六年(677年)、山背国が鴨神宮造営(式年遷宮)と記述する。社殿は既に存在していたことを意味する。

3. 賀茂氏と秦氏の繋がり

(1) 木嶋坐天照御魂神社 (このしまにますあまとるみたまじんじや) : 通称、蚕の社 (かいこのやしろ)

① 祭神

参照資料1-5

- * 天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)、大国魂神(オオクニタマノカミ)、穗々出見命(ホホデミノミコト)、鵜茅葺不合命(ウガキフキアエズノミコト)、瓊々杵尊(ニニギノミコト)。
- * 神社名「木嶋坐天照御魂神社」に表されているように、天照御魂神(籠神社の祭神)の神社。

② 神社の由緒

* 秦氏のゆかりの地

- ・嵯峨野・太秦周辺は渡来系氏族の秦氏が開拓した地で、広隆寺・松尾大社・蛇塚古墳などの関係寺社・史跡で知られることから、木嶋社もまた秦氏ゆかりの神社といわれる。
- ・通称は「木嶋神社(このしまじんじや、木島神社)」や「蚕の社(かいこのやしろ、蚕ノ社)」とも。本殿は境内の中央北寄りの、やや高所に建てられている。本殿の東側には蚕養神社(こかいじんじや、東本殿)が鎮座し、「蚕の社」の通称は同社に由来する。
- ・秦氏は機織りをして、蚕から絹を取り出すという技術を持ってきた。機織の「ハタ」から、秦氏になってという説があるが、その体を表す神社である。
- ・古くから祈雨の神として信仰された神社であり、境内には珍しい三柱鳥居があることで知られる。

* 三柱鳥居

参照資料1-6

- ・境内の北西隅には「元糺の池(もとただすのいけ)」と称する神泉があり、この元糺の池の中には三柱鳥居(みはしらとりい、三ツ鳥居/三面鳥居/三角鳥居)が建てられている。
⇒キリスト教の三位一体^注を表しているのではないかと言われる。
(注)「三位一体」とは、聖書に啓示されている神は、「父なる神」、「子なるキリスト」、「聖霊」という三つの位格を持つ。

* 元糺の池

参照資料1-6

- ・木嶋社の社叢(しゃそう)の「元糺(もとただす)の森」の中に神泉を「元糺の池」がある。この池の水は諸病に薬功があるとの神効があった。

* 元糺の池(つづき)

- ・伝承では、下鴨神社の森が「糺(ただす)の森」と呼ばれるようになる以前、元々は木嶋社の社叢が「糺の森」と呼ばれていた。
- ・嵯峨天皇の時代、この風習をとて下賀茂神社の参道の社叢を「下鴨糺の森(しもかもただすのもり)」と名づけた。そのため、木嶋社に元々あった社叢の「糺の森」を「元糺の森」に変えた。
⇒秦氏がより天皇に近い下鴨神社への名称移管を推奨したと思われる。

②物理的位置づけの不思議

参照資料1-6

- ・木嶋社の「元糺の森」と「下鴨糺の森」を結ぶラインの中間点に大内裏が位置付けられている。大内裏は秦河勝が邸宅を譲った地である。このラインは夏至の日出と冬至の日没ラインとなっている。⇒秦氏により意図的に設定されたものであろう。
- ・蚕の社の祭神は天照国照魂神は「天火明命」(籠神社祭神)の別名である。

(2) 賀茂氏

①イワレビコ尊への助け舟、八咫鳥

サイト有

- ・下社の祭神、賀茂建角身命は八咫鳥といわれる。イワレビコが熊野で道に迷った際、案内をする。
- ・大和入りの前に、長髓彦との戦いで光り輝く「金鷦(きんし)」が表れ、長髓彦の軍は総崩れになり勝利する。金鷦は八咫鳥の化身と言われ太陽に住む金鳥で天照の使いである。
⇒日本国旗掲揚時の先端の金玉は金鷦を表し、旗竿の白黒のストライプは八咫鳥を表す。

②鴨族

* 神道守護の最高権威は賀茂大社

- ・全国の神社は伊勢神宮を筆頭にすべて天皇のものであり、天皇陛下が神道の元締めである。
- ・その天皇を守護する最高の地位に、上賀茂・下鴨のカモ氏「鴨族」がいる。

* 鴨族とはユダヤ人原始キリスト教徒の祭司のレビ系秦氏という。

- ・神道における祭祀一族は物部氏、中臣氏、ト部氏、忌部氏などがあり、最も古いのは忌部氏。賀茂氏は忌部氏の中の忌部氏と言われる。